

<実践報告・調査報告>

京都産業大学ギャラリーと附属中学校・高等学校歴史部との実践報告 —生涯学習社会における博物館教育 / 博学連携の可能性について—

中尾 健二¹

京都産業大学附属中学校・高等学校歴史部と京都産業大学ギャラリー（博物館相当施設）とは、2016（平成28）年度から現在に至るまで連携・協働した取り組みを行っている。ギャラリーは、年3回の企画展および2回の所蔵品展を開催している。また、7000点以上の歴史資料、民俗資料を収集・保存している。ギャラリーと附属中高とは同一敷地内にあり、容易に往来することができる。こうした地の利を活かし、ギャラリーの展示・教育活動や所蔵資料を活用して、歴史の授業や歴史部の活動を行い、双方がより豊かな教育活動を展開することができるのではないかと考えたことが、連携をはじめたきっかけである。連携開始から現在に至るまでの約5年間の取り組みでは、その活動前後で明確な教育効果、すなわち生徒の行動の変化が見られた。本報告では2016（平成28）年度、2017（平成29）年度、2019（令和元）年度に連携して行われた3つの取り組みおよびその成果を中心に報告する。

キーワード：博物館教育、歴史教育、中高大連携、博学連携、生涯学習

1. はじめに

例年、筆者が担当している歴史の授業や歴史部の活動において、「最近博物館で鑑賞した美術品や歴史資料にはどのようなものがあるか？」と生徒に尋ねると、その多くはそもそも「博物館に行っていない。」と回答する。こうした状況を裏付ける資料として3年ごとに文部科学省が実施している社会教育調査/統計がある。2022（令和4）年7月に公表された2021年度の間接報告（資料1）を見ると、2020（令和2）年度間における博物館および博物館類似施設の1施設当たりの利用者数は、前回の2018（平成30）年度の調査時より減少しており、2017年度間における博物館の国民1人当たりの利用回数は1.1、博物館類似施設で1.3となっている。2018年度以前の調査ではその数はより少ない（資料2）。

一方、筆者が担当する歴史の授業において教科書や資料集に掲載された史資料を中心に据えた授業（個々のモノが有する価値や意味、製作された背景や大きさ、質感等について説明したり、考えたりする授業）を展開すると、講義を中心とする通史の授業よりも関心を示す生徒は多い。さらに実際に資料を教室に持ち込み、直接モノに触れることで生じる生徒の疑問を中心に据えた授業は、

より学びの質が高いものになっていることが多い。

要するに生徒にとって史資料を通じて学ぶ歴史への興味・関心はあるが、自ら博物館に足を運ぶほどのことではないということなのだろう。つまり、授業や博物館等の教育施設で史資料に触れる機会がなければ、歴史は史資料に基づいて叙述されているということが認識されることはなく、教科書や娯楽性の高いテレビドラマや映画、小説等で描かれている事柄が無批判に歴史的事実として認識されていくことになるのだろう。それで良いのだろうか。もちろん良い訳はないというのが筆者の立場である。モノはそれを必要とする人により、意味があるものとしての価値付けがなされてはじめて資料となる。複数のモノがもつ個々の内容を読み取り、読み取った情報を複合的な視野から構成して歴史の叙述がなされているということを生徒には学んで欲しい。そして、自らも歴史の描き手の一人であることを知って欲しい。また、そこで描かれた過去の事実は私たちの生活と結び付いているということ、そして現在私たちの身の回りで起こっていることが未来へと続く歴史的事実の一辺であるということを理解し、歴史は私たちの生活そのものであることを学んで欲しい。

¹ 京都産業大学附属高等学校

表 1. 1 施設当たりの利用者数（文部科学省『2021 年度社会教育統計（中間報告）の公表について』より）

	公民館(類似施設を含む)	図書館	博物館	博物館類似施設	青少年教育施設	女性教育施設	社会体育施設	劇場、音楽堂等	生涯学習センター
平成13年度間	13,753	53,016	104,372	37,971	17,279	19,480	9,482	15,980	...
16	14,694	58,042	101,721	36,401	17,234	17,939	9,900	15,810	...
19	16,419	54,862	102,799	36,213	21,737	30,747	10,309	14,941	68,484
22	15,376	57,991	101,711	36,761	21,524	29,577	10,499	12,596	69,359
26	15,666	55,534	107,437	36,051	24,442	29,164	10,864	12,205	64,061
29	15,969	54,060	116,131	38,408	25,128	34,495	11,879	12,961	62,885
令和2	9,263	42,304	52,630	17,918	10,222	14,299	6,351	3,982	25,821
平成29年度間からの増減数	△ 6,706	△ 11,756	△ 63,501	△ 20,490	△ 14,906	△ 20,196	△ 5,528	△ 8,979	△ 37,064
平成29年度間からの増減率(%)	△ 42.0	△ 21.7	△ 54.7	△ 53.3	△ 59.3	△ 58.5	△ 46.5	△ 69.3	△ 58.9

注 1. 利用者数は、公民館は「学級・講座の受講者数+諸集会の参加者数+利用者数」、図書館は「諸集会の参加者数+帯出者数(図書を借りた延べ人数)」、博物館、博物館類似施設は「学級・講座の受講者数+諸集会の参加者数+入館者数」、社会体育施設は「諸集会の参加者数+利用者数の延べ人数(陸上競技場、野球場・ソフトボール場、多目的運動場、水泳プール(屋内・屋外)、レジャープール、体育館のみ)」、劇場、音楽堂等は「学級・講座の受講者数+ホールの入場者数」、生涯学習センターは「学級・講座の受講者数+諸集会の参加者数+利用者数(会議室等の貸出しを受けた団体の延べ人数)」である。

2. 1 施設当たりの利用者数は、利用者数を施設数で除した値である。

表 2. 施設別利用者数（文部科学省『2018 年度社会教育調査 調査結果の概要』より）

区 分	計	公民館 (類似施設含む)	図書館 (同種施設含む)	博物館	博物館 類似施設	青少年 教育施設	女性教育 施設	社会体育 施設	民間体育 施設	生涯学習 センター
平成13年度間	1,256,667	222,677	143,100	113,977	155,526	20,766	3,315	440,590	156,716	...
平成16年度間	1,324,386	233,115	170,611	117,854	154,828	20,864	2,850	466,617	157,647	...
平成19年度間	1,376,146	236,617	171,355	124,165	155,706	22,113	10,675	482,351	148,380	24,784
平成22年度間	1,348,136	204,517	187,562	122,831	153,821	20,043	10,172	486,283	136,424	26,483
平成26年度間	1,336,003	193,464	181,364	129,579	150,417	20,058	9,716	501,557	123,630	26,218
平成29年度間	1,340,477	166,517	177,899	142,456	160,613	19,729	11,310	526,725	107,939	27,290
増 減 数	4,474	△ 26,947	△ 3,465	12,877	10,196	△ 329	1,594	25,168	△ 15,691	1,072
伸び率(%)	0.3	△ 13.9	△ 1.9	9.9	6.8	△ 1.6	16.4	5.0	△ 12.7	4.1
国民1人当たりの 利用回数	10.6	1.3	1.4	1.1	1.3	0.2	0.1	4.2	0.9	0.2

(注) 1. 利用者数は、図書館は「図書の帯出者数」、博物館及び博物館類似施設は「入館者数」である。
 2. 体育施設は、陸上競技場、野球場・ソフトボール場、多目的運動広場、水泳プール(屋内)、水泳プール(屋外)、レジャープール、体育館の利用者数のみである。
 3. 「国民1人当たりの利用回数」は、「平成29年度間」の数値を総務省統計局「平成29年10月1日現在推計人口(総人口)」(126,706千人)で除した値である。
 4. 四捨五入の関係で内訳と計は必ずしも一致しない。(以下の表において同じ。)

2012（平成 24）年 4 月、京都産業大学附属中学校・高等学校（以下、附属中高）は、京都市上京区相国寺門前町から下京区中堂寺命婦町へと移転した。移転時に校地に隣接して京都産業大学むすびわざ館が設置され、5 月には館内に京都産業大学ギャラリー（2015 年に博物館相当施設として登録。以下、ギャラリー）が開館した。博物館といえば、資料を調査・研究、収集・保存、展示・教育を役割とする社会教育施設 / 機関である。

『京都産業大学ギャラリー要覧』（2022 年。以下、『要覧』）によるとギャラリーは、「大学博物館として、大学史に関連する資料や、京都における歴史、文化に関する資料を所蔵し（2022 年 10 月現在の登録済み資料は、歴史資料 7011、民俗資料

68、計 7079）、学生や地域住民の関心を深めるべく公開展示や保管業務を行う。」と記されている（一部改）。附属中高とギャラリーは同一敷地内に存在し、相互に往来しやすい環境にある。つまり、生徒自らがギャラリーに足を運び、資料を見たり、触れたりする機会を作れば、学術的に歴史について考える機会が増す可能性は高まる。中高生に足を運んでもらいたいという意識はギャラリー側にも存在していた。こうして、2017（平成 29）年 2 月から附属中高とギャラリーとが連携・協働した活動が実現することになった。

本稿では、附属中高の歴史教師、歴史部顧問として教育活動に携わる筆者（学芸員資格所有）が現在の生涯学習社会における中等教育が果たす役

割について、博物館教育と学校教育（博学連携）の視点からギャラリーと歴史部とが協働して行った実践を事例として、その成果を中心に報告する。

2. 附属中高歴史部とギャラリーとの連携の経緯

附属中高歴史部とギャラリーとが連携・協働した取り組みを行う経緯について報告する前に歴史部とギャラリーについて紹介し、その後に連携の経緯を述べたい。

2.1. 附属中高歴史部

歴史部は中高が合同で週2回、放課後2時間程度、パソコンが使用できる教室や図書館、中高に隣接する京都産業大学むすびわざ館で活動をしている。部員は年度により異なるが、概ね中高あわせて10～15名程度で推移している。学校開設当初は女子部員が多かったが、最近では男子部員が多く、附属中学校在籍時に入部した生徒が高校入学後も活動を続けるケースが多い。ギャラリーと連携した取り組みを行うまでは、各部員が興味のある歴史的事項や人物について調べ、部内報告会を開催したり、文化祭で発表したりする活動を中心に行ってきた。また、テーマを決めて調査を行い、年に数回の京都市内におけるフィールドワークおよび年1回の京都市外への体験学習を含めたフィールドワークを行ってきた。

市内におけるフィールドワークは、旧校地周辺（相国寺周辺）の史跡・社寺見学、河原町周辺における幕末の史跡見学、京都市考古資料館の見学、大徳寺の修復現場見学、非公開文化財特別公開（各公開寺院・京都市・公益社団法人京都市観光協会主催「京の冬の旅」）の見学が主な内容である。また、京都市外へのフィールドワークは、これまでに名古屋、姫路、和歌山、大垣・関ヶ原、伊賀上野、彦根、神戸、岐阜、篠山を訪れ、城および城下町、地域の博物館の見学を中心に行い、火起こしや和菓子作り、升造り等の体験学習も行ってきた。

その他、2014（平成26）年度に京都産業大学と附属中高とが連携して、部活動によるオール京都産業大学としての一体感をもつことを目指してはじまった「中高大連携歴史探索バスツアー」に毎年参加している。

こうした活動に加えて、2016（平成28）年度以降は、ギャラリーとの連携を中心とした活動を進めている。

2.2. 京都産業大学ギャラリー

ギャラリーについては、『要覧』に掲載されてい

る「概要」を引用する形で紹介したい。

「京都産業大学ギャラリーは、京都産業大学創立50周年記念事業の一環として、本学と社会を結ぶ『知』の発信拠点となるべく、壬生校地のむすびわざ館に平成24（2012）年に開設された。…開館以来、毎年企画展・特別展・所蔵品展等を企画し、これまでに歴史・文化・芸術・民俗・自然科学に関する展示を開催している。また、展覧会ごとに講演会やシンポジウム、実演等のイベントも企画・開催している。その他、学芸員資格の取得をめざす博物館実習生の受け入れを行い、隣接する京都産業大学附属中学校・高等学校の生物部や歴史部と共に展示や実習を行って、大学・高等学校・中学校と連携した活動をしている。京都産業大学50周年にあたる平成27年には、博物館相当施設に登録された。この年、京都・大学ミュージアム連携に加盟し、…同年京都市内博物館施設連絡協議会に入会し、地域や大学間との連携を強め、活動の幅を広げている。…令和4年、開館10周年を迎えた。この年、日本博物館協会に入会して、全国の博物館とのつながりを強化している」とある。

また、『要覧』の巻頭で石川登志雄室長が「ギャラリーについて」と記した一文に「京都産業大学附属中学校・高等学校の教員・生徒との共同による研究・教育企画にも積極的に取り組んでいることも本ギャラリーの大きな特色の一つと言えよう。」とある。

2.3. 附属中高とギャラリーとの連携の経緯

さて、中高歴史部およびギャラリーの概要については紹介した通りであるが、両者が連携するきっかけは2007（平成19）年まで遡る。同年4月に京都成安中学高等学校は、設置者変更により京都産業大学の附属中高となった。筆者は歴史を専門とする先生が複数おられる大学の附属校になり、両者が連携することで、授業や部活動が従来以上に専門的で、より豊かな教育活動が展開できるのではないかと考えた。まずは、歴史部の連携からと考え、附属中高が開校して早々の6月に当時の学校長（大学副学長兼務）を通じて大学との連携の提案を行ったところ、のちに初代ギャラリー室長となる文化学部の鈴木久男教授よりご快諾のお返事をいただいた。同年中に生徒とともに大学の校内にある鈴木研究室を訪問し、複数の考古資料に触れる機会を得た。鈴木教授が目の前に並べた埋蔵文化財を次々と手にとり、「これは何だと思う？ これを見てどう思う？」という問いに対して、生徒同士が意見を出しあっている姿や生徒自らが研究室内で弓を見つけて、「これは何ですか？」と質問

する姿を見て、モノ（資料）を活用することおよび専門的な知見を有する先生との連携が、より高度な知を獲得するうえで重要であることを確認した。

中高と大学との距離が離れていたことや中高大はそれぞれが異なるカリキュラム、年間計画の中で運営されているという事情があり、その後継続して連携した活動をすることはなかった。しかし、2014（平成26）年度に中高大連携歴史探索バスツアーが開始されたことで、1年に1度、京都産業大学郷土史研究会（当時、鈴木教授が顧問をされていた）の学生と附属中高歴史部の生徒が交わることになり、ツアーの訪問先でモノを見たり、触れたりして、教授からお話を聞く機会が設けられることになった。こうして鈴木教授と附属中高とが関わり合う機会は定期的にもたれるようになった。

続いて、大学側に目を向けると、2012（平成24）年に学芸員養成課程において、その質的向上を図るために一部改正された『博物館法施行規則』（2009年改正）が施行され、博物館教育論等の新科目が設置された。博物館教育論では、「博物館における教育活動の基盤となる理論や実践に関する知識と方法を習得し、博物館の教育機能に関する基礎的能力を養うこと」がねらいとされた。その内容の1つとして「生涯学習社会における家庭教育・学校教育・社会教育の役割と連携」が明記されており、博物館のあり方をめぐる状況が変化していくなかで、2016（平成28）年11月、当時ギャラリーの室長でもあった鈴木教授から筆者に対して、博物館教育やギャラリーと附属中高との連携についての相談があった。同年3月は博物館法施行規則が改正施行され、大学が卒業生を送り出した最初の年である。打合せでは、附属中高における授業実践や部活動成果の展示、ギャラリーにおける学芸活動の補助、専門職員（学芸員）による附属中高生への授業や展示解説が行えるのではないかという話をしたと記憶している。

こうして、附属中高とギャラリーとが本格的に連携をはじめると体制が整い、翌年2月にはじめて連携した活動が行われることになった。



写真1. 鈴木久男研究室訪問時の様子

3. 連携の事例

附属中高とギャラリーとの連携は2016（平成28）年度から現在にいたるまで、継続して行われている。一連の取り組みの中から、今回は2016年度から2019（令和元）年度までに行われたギャラリーと歴史部における3つの取り組みについて報告する。

3.1. 企画展「仏像修理の現場」および美術院見学—ワザの展示見学から、ワザの現場見学へ—

2017（平成29）年1月23日～3月11日、ギャラリーでは、第12回企画展「仏像修理の現場-美術院国宝修理所・伝統のわざと新しいわざ-」が開催された。この企画展において、附属中高歴史部とギャラリーにおける博学連携、中高大連携がはじめて実現した。具体的な内容とねらいは、図1の通りである。



写真2. 浅子里絵学芸員による展示解説

内容	第12回企画展「仏像修理の現場」の見学およびギャラリートークへの参加。
ねらい	①附属中高生が展示見学することで、歴史について考える機会を設定する。 ②附属中高生が直接モノに触れる機会を設けることで、より深い歴史像を描くことができるようになる。 ③附属中高生がギャラリートークを通じて、新しい知見を獲得する。 ④歴史部とギャラリーによる連携の可能性を模索する。

図1. 連携の内容とねらい

2月16日、5名（中学生2名、高校生3名）の生徒とともにギャラリーを訪れ、企画展を見学した。ギャラリーには、公益財団法人美術院（以下、美術院）が仏像修理の際に使用する道具や東大寺

南大門仁王像吽形頭部樹脂型（等身大）等が展示されており、浅子里絵学芸員による展示解説と質疑応答をあわせ、約1時間のギャラリートークの時間を設けた。生徒から出た質問や感想では「修理道具などはその仏像の修復のためだけに作られたこと」、「東大寺南大門仁王像の修復作業では腕一本だけで25本もの部材で組まれていることを知った」とあり、仏像を製作したり、修復したりする人たちの様々な工夫に驚いている様子が見られた。また、「クスノキやケヤキ、ヒノキでつくられた仏像（模倣品）に触れたり、臭いを嗅いだりしながら、材質の違いについて知る体験ができた」とあり、当たり前なことだが、モノに直接触れないと分からないことがあるということに気付く様子も見られた。

図1「ねらい」の②における「より深い歴史像」と関連して述べるならば、生徒たちは実物を鑑賞することで仁王門像が複数の部材を用いて丁寧に作られていること、仏像の素材について材質や年輪に至るまで計算して作られていること等について、体験的（感覚的）に学んだのではないだろうか。東大寺南大門金剛力士像について、高校日本史の教科書として最も採択率が高い「詳説日本史（改訂版）」（山川出版社、2022年）には、写真が掲載されており、「東大寺南大門の左右に立つ約8.5mにおよぶ木造の仁王像。阿形と吽形がある。運慶・快慶らの仏師が短時日に製作したもので、そのみなぎる力強さは勃興する武士の力を示すかのようである。」と解説がある。企画展の見学を通じて「短時日」で、これだけのモノを作った運慶・快慶らのワザの凄さが分かる。

こうした学びの場が附属中高と同一敷地内にあるにも関わらず、訪問前にギャラリーの存在を知っている部員は皆無であった。

当初予定していなかったが、今回の取り組みはその後、実際に仏像修理の現場を見ることへとつながった。生徒および筆者に「現場展」ではなく、現場を見たいという思いが生じたからである。

3月23日、生徒8名（中学5、高校3）、学芸員2名とともに美術院を訪問し、仏像修理の現場を見学するとともに、工房長の八坂寿史氏から目の前にある仏像をどのようにして修理しているのか（技術や思い）について、話していただいた。修理中の仏像や修理道具等についての説明に加えて、先人の知恵に学び、技術を磨き、継承していくことの難しさと必要性についてお聞きしたが、その詳細は、八坂寿史『仏像さんを師とせよ 仏像修理の現場から』（淡交社、2020年）があるので、そちらを参照されたい。

3.2. 企画展「灯りの道具」におけるワークショップ プーモノづくりを通して、ホンモノのワザを学ぶ

2017（平成29）年9月25日～11月4日、ギャラリーでは、第14回企画展「灯りの道具」が開催された。企画展開催にあたり、ギャラリーから中高生を対象にワークショップを行い、その作品を展示したいという提案があった。ワークショップの具体的な内容とねらいは、図2の通りである。

内容	第14回企画展「灯りの道具」のワークショップへの参加および作品展示。
ねらい	①京都の伝統産業の1つである京提灯を製作する小嶋商店にて昔ながらの製法で提灯を製作し、京都の伝統産業と職人の世界に触れる。 ②中村ローソクにて和蠟燭の絵付け体験を通じて、植物を料とする和蠟燭を直接手に触れ、西洋蠟燭との違いを感じ取る。また、和蠟燭を製造している工場を訪れ、職人の仕事の一部を知る。

図2. 連携の内容とねらい

8月31日、6名（中学生2名、高校生4名）の生徒と学芸員3名とともに小嶋商店を訪れ、「ちび丸提灯」製作体験を行った。小嶋商店は寛政年間以来、地貼り式（竹ひごを一本ずつ輪にして平行に組む）の京提灯を製作している会社であり、毎年京都南座の大提灯はここで作られている。

工房では提灯製作のワークショップをする一方で提灯作りの大元となる「竹割り」の作業を見学し、手作業で素早く均一の太さに竹を割っていくその技術の高さに生徒共々驚かされた。我々の周囲は多くのモノで溢れているが、その製作過程を見聞きする機会は意外と少ない。教科書では体系的に効率よく「歴史」を学ぶこと/教えることはできるが、身近な生活の中にあるモノやワザ、それに関わるヒトと結びつけて考えること/考えさせることは十分にできているとは言い難い。正確に言えば筆者にはできていない。歴史とは人々の身近な出来事の集積により構成されるものである。附属中高生には、学校の授業ではあまり関わることがない江戸時代から続く職人のワザに触れることで、歴史は多用かつ多面的なものであるということ学んで欲しいと強く思った。

今回の企画展では、提灯作りの他に和蠟燭の絵付けも行っている。すでに展示は会期を迎えていたが、10月1日、5名（中学生2名、高校生3名）の生徒とともに和蠟燭の製造工場見学および有限会社中村ローソクにて和蠟燭絵付け体験を行っ

た。工場見学では「芯巻き」から「蠟付け」「蠟塗り」に至る和蠟燭が製造されるまでの工程について見学し、絵付け体験では、図2のねらいにあるように絵付け作業を通じて、身の回りにある西洋蠟燭と和蠟燭との違いについて匂いや感触を意識しながら作業をすすめた。

こうしたワークショップ、および9月に開催された附属中高における歴史部の文化祭展示（「灯り」についての調査とまとめ）を経て、10月5日に4名（中学生4名）の生徒とともにギャラリーを訪れ、企画展を見学した。ギャラリーでは、浮世絵を用いて近世から近代にかけての照明器具が説明されており、附属中学生が江戸、明治時代の日常生活において「灯り」がどのように使用されていたのかについて、瞬時に学び取った様子が見て取れた。また、浮世絵を用いて「灯り」について展示するという方法は、生徒自身が文化祭で展示する際には全く気付かなかった方法であり、表現手段は多種多様であることを学んでいた。第12回企画展に引き続いて、今回も浅子学芸員による展示解説と質疑応答をあわせ約1時間のギャラリートークの時間を設けた。



写真3. ちび丸提灯製作現場および展示された提灯

3.3. 企画展「大嘗宮」と模型製作—模型作りを通してアカデミックな学び方に触れる—

2019（令和元）年10月15日～12月7日、ギャラリーでは、第19回企画展「大嘗祭」が開催された。企画展ではその1コーナーで、附属中高生を中心に京都産業大学鈴木ゼミの学生も加わり製作した大嘗宮模型が展示された。6月から鈴木教授

を中心に学芸員、筆者を含めて、模型作りのねらいや作業日程について、綿密に連絡を取り合いながら準備をすすめた。2学期開始早々の9月5日から企画展開催初日にあたる10月15日までの週2回の部活動の時間をすべて模型作りに費やした。この取り組みは、中高歴史部とギャラリーの両者が準備段階から協議を重ね、連携・協働した初めてのものである。具体的な内容とねらいは、図3の通りである。

内容	第19回企画展「大嘗祭」における大嘗宮の模型製作および展示。
ねらい	①模型製作の過程で生じるとされる様々な疑問について、史資料に目を通したり、類似建造物を見聞するフィールドワークを行ったりして、生徒同士が意見を出し合うなかで、疑問の解決を図る。 ②主体的・対話的・協働的に模型作りを行い、その作業を通じて伝統行事や歴史的建造物、歴史に対する関心を深める。 ③学術的な取り組みは、中高生にもできるということを模型作りの作業を通じて確認し、その学びの成果を中高生の視点で、分かりやすく社会に向けて情報発信する。

図3. 連携の内容とねらい

3.3.1. 鈴木教授による設計図の作成と材料の収集

6～8月、学芸員と筆者を中心に9月からはじまる模型製作に向けたギャラリーおよび附属中高における日程調整を行い、双方で模型製作のねらいについて情報共有を進めた。その間、鈴木教授は京都府立京都学・歴彩館所蔵「大嘗宮之図」（写真4）を参考に縮尺等を計算し、図面に書き起こした（写真5）。屋根に設けられた千木や鯉木については、ギャラリー所蔵の『御大禮圖譜』（1915年/写真6）をはじめとして複数の文献に当たったが皆それぞれであり、最終的にどの形を採用するのかについては生徒に任せることにした。

材料の収集は、校地周辺にある工務店や豊店から端材をいただいたり、公園等で適当な小枝を拾ったり、川に堆積している白砂を採集したりして行った。爪楊枝や竹箒、竹、和紙、接着剤などは100円ショップやホームセンター等で購入した。建物の壁にはハレパネ（のり付きスチレンボード）を使用した。

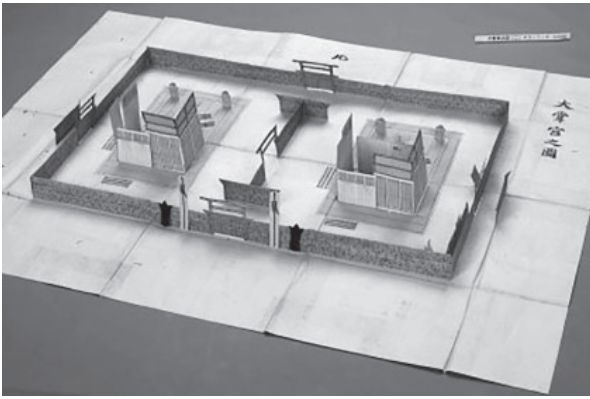


写真4. 大嘗宮之圖
(京都府立京都学・歴彩館所蔵)

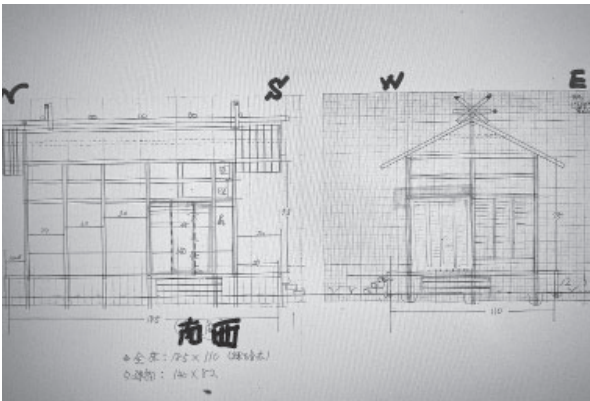


写真5. 鈴木教授作成主基・悠紀殿設計図

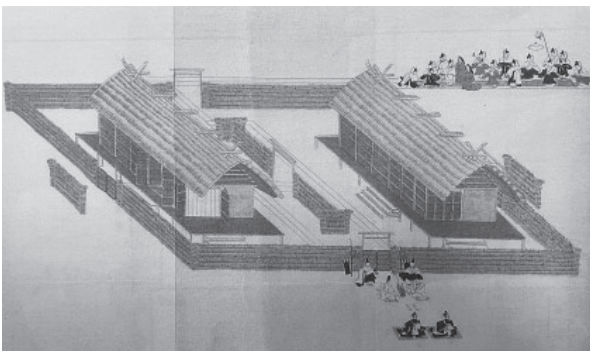


写真6. 大嘗宮之圖
(京都産業大学ギャラリー所蔵『御大禮圖譜』より)

3.3.2. 模型製作

9月に入り、模型製作を開始した。全9回（各回2時間程度）で作業を行い、参加人数はそのときにより異なるが14名（中学生7名、高校生3名、大学生4名）の生徒・学生が関わった。作業工程は図4の通りである。

9月初旬	鈴木教授「大嘗宮の模型製作勉強会」
下旬	建物を覆う柴垣（垣根）製作
10月上旬	柴垣製作、建物の壁製作、鳥居製作(大学生)
中旬	柴垣、鳥居の組み立て作業、建物の装具製作、建物の屋根製作
下旬	建物の配置、白砂を捲く、ギャラリーに設置（展示）

図4. 作業工程

鈴木教授により図面に起こされた設計図（写真5）はあったが、それをどのような手段で製作するのかについては、個々の生徒に任せることにした。まず柴垣の製作から作業をはじめたが、個々の間隔を空けて竹穂を接着し最後に隙間を埋める生徒、はじめから竹穂の間隔に隙間を作らずに接着する生徒など、予想通り製作技法は多様であった。自分が製作していた柴垣を完成させた生徒は他者の製作したもの/製作しているのを見て、こうしたらうまくいくのかと感心しつつ、2つ目の柴垣づくりに入っていった。また1つの工程を終えると、次第に我々が指示をしなくても図面を見て次の工程を自分で考え、製作する姿も見られるようになっていった。柴垣の製作を通じて、モノを観察する力が働いている印象を強く受けた。モノを観察して、特徴を見つけ、そのモノがもつ価値や意味を発見していくことは研究者が行う行為そのものである。機会さえあれば中高生にも研究はできるということを実感した瞬間であった。

続いて、建物の壁および装具の製作に取りかかった。実際に建物に使用されている素材とは異なるが、絵画資料や図面を参考にしながら、身近な素材を用いて建物の壁面をつくり、組み立て、実物に似せて仕上げていった。こうした一連の過程のなかで自分が住んでいる地域にある社寺の壁や柴垣はどのように作られているのかといった声があがり、普段あまり意識することもなかった身近に存在するモノへの関心が芽生えていることを実感した。

模型のパーツがほぼ完成した10月中旬に柴垣等の組み立てを行い、建物の仮置きを行った。模型の全体像がイメージができたところで、生徒は中間審査を迎えることになり、生徒の作業はここで終了することになった。最後まで生徒の手に委ねたいという思いは強くあったが、展示の会期のこともあり、屋根の茅葺き作業は鈴木教授と筆者とで行うことにした。茅に見立てて竹箒の先端を素材にして、その竹箒の先端を20本程度重ね、紐で縛り、屋根板に葺いていく作業は、気の遠くなるような作業であった。作業途中で四隅の茅をど

のように葺けば形が整うのかについては苦労した。模型製作当時も / 現在でも寺社や古い民家を訪れるたびに屋根の隅を確認するが、未だにその技法はよく分からない。

生徒の手により完成させることができなかったことは未だに心残りである。しかし、完成しなければ学びにならないのかといえば、そんなことはない。最後まで完成させることができたのならもちろんそれに超したことはないが、「ねらい」に記したように、模型製作の過程で生じた疑問について、史資料に目を通したり、生徒同士が意見を出し合ったりするなかで、疑問の解決を図ろうとする行為がそこにはあったからである。



写真7. 柴垣の製作



写真8. 建物の製作

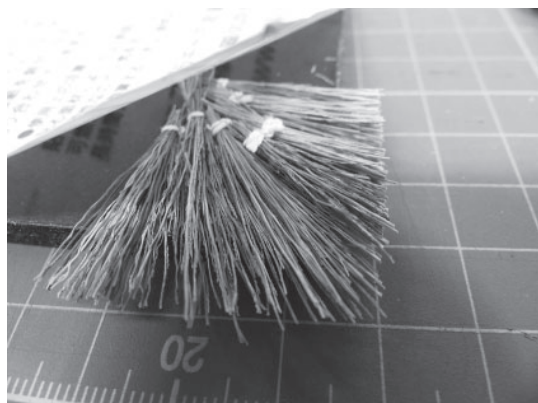


写真9. 屋根葺き



写真10. 完成した大嘗宮模型

4. 生涯学習社会における博物館教育 / 博学連携の可能性について ——連の取り組みの中から見えてきたこと——

さて、ここまで附属中高とギャラリーとが連携をはじめた経緯および取り組みの内容について見てきたが、筆者は一連の取り組みは、中高大連携や博学連携という枠組みに留まるものではなく、現在の生涯学習社会において博物館（博物館教育）や中学校・高等学校（学校教育）に何ができるかという問いに対してギャラリーと筆者が連携して、ギャラリーが主催する企画展の機会を活用して模索してきたものでもあると考えている。

倉田・矢島（1997）は「学校教育であれ、社会教育といわれるものであれ、人間としての教育の目的に変わりはあるまい。」としたうえで、「学校教育とか社会教育とか区別されるには、そこに何らかの異なりがあるはずである。教育環境（場所）の異なりは、その対象、内容、方法の異なりに繋がるものであろう。」と述べている。そして、学校教育と博物館教育との違いについて、次のような表にまとめている。

表3. 学校式教育

1	<ul style="list-style-type: none"> ・特定の児童・生徒・学生 ・年齢、知識レベルはほぼ一定
2	<ul style="list-style-type: none"> ・一斉授業形式（主として集団） ・教科書（言語・文字）を中心とし先生が生徒に教える（授業） ・主として理性に訴える（論理的） ・学習指導要領による定型、継続

表 4. 博物館式教育

1	<ul style="list-style-type: none"> ・常に不特定多数の人々 ・年齢・知識レベルの格差あり
2	<ul style="list-style-type: none"> ・個人学習を主とし、集団学習も可能である ・展示品（モノ）を中心としモノそのものに語る（媒介的） ・主として感性に訴える（直感的） ・学習者の自由意志に基づく非定型、非継続

この表 3・4 は、学校教育と博物館教育との違いについてよくまとめてあり、現在出版されている書籍等においても引用されることが多い。しかし、最近の 20 年間において IT 技術は飛躍的に高度化し、社会のあり方は大きく変化した。専門的な情報は研究者や教員のみが知っている状態から、いつでも、どこでも、誰でも容易に獲得できる時代へと変わり、学校や博物館の教育の形も大きく変わりつつある。

博物館教育においては、学芸員が企画した展示を来館者が一方的に見る、聞く、読む、触るといった活動だけではなく、来館者が展示を見て解釈した内容を学芸員と対話して両者の相互作用によって展示 / 展示物に対して新しい意味づけをしていくことを目指した博物館 / 博物館展示も見られる。例えば国立科学博物館を対象にコミュニケーションモデルを提案した小川（2017）は、「辞書から選択した言葉に、参加者自らが当てはまると思った展示物の写真を撮影し、言葉と組み合わせで自分だけのオリジナル作品を制作し、それを参加者間で発表する」という学習プログラムを開発し、「『体験』と『言語』を組み合わせ、他者との対話を行い、展示物に対する『新たな学び』を示唆する」ことを行っている。つまり、表 4 の考え方を基礎としつつも、展示の構成者（学芸員）と展示物（モノ / 資料）との間に来館者を挟むことで展示品（モノ / 資料）の語られ方が変わるという点では、従来の博物館展示 / 教育のあり方とは大きく異なっている。また、「時には博物館側と来館者側との認識のズレというべきコミュニケーションギャップがあることに気付く。ギャップがあるからこそ、両者のコミュニケーションが必要であろう」と述べている。

学校教育においては「教科書を中心として、先生が生徒に教える」（生徒が知識を習得する）という学習のスタイルから学び方を学び、学び得た知識・技能を活用することが優先されるというスタイルへと変化してきている。

文部科学省（2019）は、「生涯にわたって探究を深める未来の創り手として送り出していくこと

がこれまで以上に求められる。そのため、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善が必要。特に、生徒が各教科・科目等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実が必要」と述べている。つまり、各教科の特性に応じた学び方や思考法など技法の習得を身につける学習を重視することで、生涯にわたって探究を深める未来の創り手として送り出していくことを求めている。

主体的・対話的で深い学び（アクティブ＝ラーニング）を目指す授業のあり方の 1 つとして、博物館を活用した教育活動を展開することが有効であることは、実践例の中で述べてきたとおりであるが、追記事項も含めて、筆者が附属中高歴史部とギャラリーとの連携を通じて見てきた博学連携による教育効果について、再度まとめておきたい。

第 1 にモノに直接触れることは、豊かな想像力を育むということである。企画展「仏像修理の現場」では、仏像の素材となる様々な木に触れることで色やつや、堅さや匂いを感じ取り、「柔らかい木を使用すれば製作はしやすいが、長期保存は難しいだろう」とそれぞれの木によって作られる仏像の姿を想像している様子が見られた。

第 2 にモノ（実物資料）を見ることは、知見を広げることである。企画展「仏像修理の現場」では、東大寺南大門仁王像吡形の樹脂型模型（手部、足部、頭部；1 分の 1 縮尺）を見て実際の仁王像の大きさを感じ取ったり、同像の構造模型を見て骨組みや寄木の方法からその構造の複雑さや技術の高さを学び取ったりしていた。

第 3 に展示を見ることは、モノに対する興味・関心や意欲を向上させるということである。企画展「仏像修理の現場」を見学した生徒は、インターネットや書籍、教科書を使用して、東大寺南大門の仁王像について調べていた。筆者自身の関心もあったが、こうした生徒の様子が実際に仏像修理の現場見学に行く機会へとつながった。

第 4 にモノの修理や製造される過程を知ること、目の前にあるモノの背後には常にヒトとワザが存在していることに気付くことにつながるということである。既製品を購入して生活するのが当たり前の社会では、そのモノが生産される過程を意識することはあまりない。つまりモノと自分自身との間に介在しているコトへの気付きは、社会に対する認識（社会性）を高めたと言えるだろう。

第 5 にモノ作りは地域に存在する歴史的建造物

や伝統行事、歴史に対する意識を高めるということである。企画展「大嘗祭」における模型作りでは、大嘗宮の柴垣作りを行ったが、その過程において自分が住んでいる地域にある寺社の柴垣はどうなっているのだろうかという声を聞いた。加えて、そもそも大嘗祭とは何か、天皇が住んでいた御所の建築はどうなっているのかという疑問の声も聞いた。

また、モノ作りはモノを観察する力を育むということである。すでに述べたとおりであるが、模型作りの作業過程において資料や図面を見ながら自分が作った/作っているモノを観察・比較して、特徴を見つけ、そのモノがもつ価値や意味を見いだそうとする姿が見られた。こうした物事を科学的に捉えようとする視点は、大学や社会での学び、そして生涯学習へと続く、学術的にモノやコトについて考える土台となるだろう。

さらに協働作業によるモノ作りはコミュニケーションを促すということである。歴史部は、大嘗宮の模型を製作するまでは個別の活動が中心であった。設定したテーマについて調べ、発表して、評価を聞き、さらに良いものへと仕上げていくという形であった。発表して、評価を聞くという行為の中にコミュニケーションは存在しているが、個人の枠を超えた協働の学びというものはほとんどなかった。模型製作を通じて学年を超えてのコミュニケーションが生まれた（もちろん個の学びを否定するものではない）。

第6に学芸員という中高生にとっては、ほぼ接点がない他者と交わることで学校や家庭とは異なる社会の存在を知る機会が設けられたということである。将来の進路決定をしていく時期だからこそ、たくさんのモノ、ヒト、コトに触れ、多様なものの見方、考え方を身につけ、自分自身の生き方について考える機会となり得た。

第7に学芸員や教員にとって、中高生がどのようにモノを見ているのか、どのようにして学びを深めていくのかについて知ることができたことである。モノがもつ価値について正確に認定するのが専門家の役割であるが、作業過程において、生徒の柔軟な発想が私たちに新しい視点をもたらす場面があった。

他にも取り組みの成果は考えられるだろうが、この辺りで留めておく。

さて、最後に生涯学習社会について記しておきたい。すでに1981（昭和56）年に中央教育審議会は「生涯学習について」という答申を行っており、「今日、変化の激しい社会にあって、人々は自己の啓発や生活の向上のため、適切かつ豊かな学

習の機会を求めている。これらの学習は、各自が自発的意志に基づいて行われることを基本とするものであり、必要に応じ、自己に適した手段・方法はこれらを選んで、生涯を通じて行うものである。これを生涯学習と呼ぶのがふさわしい」としている。現在における「今日、変化の激しい社会」の内容については、「平成30年度文部科学白書」（2018年）において「『人生100年時代』、『超スマート社会』（Society5.0）」に向けて社会が大きな転換点を迎える中であって…国民一人一人が生涯を通して学ぶことのできる環境の整備、多様な学習機会の提供、学習した成果が適切に評価され、それを生かして様々な分野で活動できるようにするための仕組みづくりなど、生涯学習社会の実現のための取組を進めています。」とあることから、「人生100年時代」「超スマート社会（Society5.0）」と理解してよいだろう。そして教育基本法第3条では、「国民一人一人が、自己の人格を磨き、豊かな人生を送ることができるよう、その生涯にわたって、あらゆる機会に、あらゆる場所において学習することができ、その成果を適切に生かすことのできる社会」を生涯学習の理念としている。

本稿では、2016～2019年度までに附属中高歴史部とギャラリーとが連携・協働した取り組みを報告し、学校教育と博物館教育の視点からその成果を論じて、今後の生涯学習社会における中高大連携や博学連携の方向性を示唆しようとしたものである。

13歳から22歳くらいまでの思春期・青年期は急激な身体の成長だけでなく、心も大きく成長する時期である。この時期の経験が将来の自分自身に影響を与えることは少なくない。2020（令和2）年度以降、中高歴史部およびギャラリーは年間事業計画書にも連携活動について明記し、継続して取り組みを行ってきた。大別すると、①モノをつくる行為（編み籠、かわらけ）を通じて先人の智慧や技術を学ぶ取り組み、②展示物について調べ展示マップを作成し、展示物についての理解を深めるための取り組み、③モノ資料の価値について考えたり、学校教育と博物館教育の違いについて考えたりする取り組みといったところであろうか。モノづくりや展示を通じて生じた疑問に対して、アカデミックな調査・研究を進めて、自分なりの回答を得て、表現することを大切なこととして取り組んできた。その過程で学んだモノに対する見方や考え方、手段や方法は生徒個々の将来における思考や行動に大きな影響を与えるものとなるであろう。

今回は時間と紙面の関係で2019年度までの取

り組みを報告したが、2020年度以降については、別の機会に報告したいと思う。

謝辞

ここで報告した一連の取り組みは、京都産業大学ギャラリー室長の鈴木久男教授、学芸員の木村大輔氏、浅子里絵氏、川上由里絵氏、川上万尋氏、内藤唯氏、柳瀬美紀氏との協働で行った通り組みである（所属・役職は当時のもの）。ギャラリーからの提案や連携と協働なしには実践できるものではなかった。また、論文執筆に当たり、ギャラリーから多くの資料を提供していただいた。この場を借りてギャラリーの皆様へ感謝申し上げたい。

参考文献

- 倉田公裕, 矢島國雄 (1997) 『新編博物館学』 東京堂出版, 東京
- 京都産業大学ギャラリー (2022) 『京都産業大学ギャラリー要覧』, 京都
- 文部科学省 (2019) 「新学習指導要領について」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shisetu/044/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2019/06/19/1418049_006.pdf (取得 2022.09.12)
- 文部科学省 (2020) 「調査結果の概要」『社会教育調査 - 平成 30 年結果の概要』
https://www.mext.go.jp/content/20200319-mxt_chousa01-100014642_3-1b.pdf (取得 2022.09.12)
- 文部科学省 (2022) 『令和 3 年度社会教育統計 (中間報告) の公表について』
https://www.mext.go.jp/content/20220727-mxt_chousa01-100012545_1.pdf (所得 2022.09.12)
- 小川義和 (2017) 「コミュニケーションとしての博物館教育」『日本科学教育学会年会論文集』 41:221-222
- 笹山晴生, 佐藤信, 五味文彦, 高埜利彦ほか 12 名 (2016 検定済 /2022 発行) 『詳説日本史改訂版』 山川出版社, 東京

The Potential in Academic Collaboration to Enhance Student Experiences in a Society of Lifelong Learning: A Report on the Collaboration between Kyoto Sangyo University Gallery and Kyoto Sangyo University Junior and Senior High School History Club

Kenji NAKAO¹

Kyoto Sangyo University Junior and Senior High School History Club and the Kyoto Sangyo University Gallery (a gallery facility equivalent to museum standards) have collaborated since 2016. The gallery holds special exhibitions three times a year and collection exhibitions twice a year. It has also collected and preserves over 7,000 historical and traditional Japanese folk objects. The gallery and the attached junior and senior high school are located on the same site, making it easy for students to access the exhibits. In this exhibition space and its location, we saw the potential of a collaborative educational effort to utilize the exhibitions to enhance educational activities in history classes and the history club to create a richer experience for students. Over the past five years, we have confirmed the beneficial educational effects of these collaborative educational experiences. In this report, we will report on the achievements and challenges of academic collaboration between Kyoto Sangyo University Junior and Senior High School and the Kyoto Sangyo University Gallery obtained through three activities conducted in 2016, 2018, and 2019.

KEYWORDS: Museum Based Education, History Education, Educational Collaboration, Lifelong Learning

2022年11月25日受理

¹ Kyoto Sangyo University Senior High School

